

佳作賞

「瓦礫のなから」

「AMAZON」45

6号

森沢周行氏

森沢周行（もりさわ・しゅうこう／本名・折原利男）

一九五〇年、埼玉県久喜市生まれ。現在、久喜市在住。

73年、東北大学工学部卒業。76年、早稲田大学第一文学部

（人文専攻）卒業。76年より埼玉県立高校教諭（国語）。

89年より、同人誌「AMAZON」に参加し、小説や評論、

ノンフィクションやエッセイを発表。また、「軍縮問題資料」等の雑誌にも、評論や教育現場からの報告などを執筆

著書と主な評論、作品

『現場からの教育再生——言葉で拓く学びの豊かさ、可能性』（すずさわ書店、2011年3月）

『平和と教育——高校教育の現場から（『軍縮問題資料』08

）

）

「瓦礫のなから」（改稿版）——作品概要「受賞作は『AMAZON』No.456掲載ですが、No.458（13年3月）で第17節を加筆改稿し、完成稿としました。」

高校の現場に立つ賀川は、3・11の年の8月に1週間、気仙沼でのボランティア活動に参加した。目の前に広がっているのは、何もかも破壊し尽くされた瓦礫、瓦礫の巨大な廃墟である。千年に一度。未曾有。想像を絶する。空前絶後……。思いつくどんな言葉もリアリティを持つことができない。参加者たちは、現地の要請に応じて、さまざま支援活動を行う。日中の作業を終えると、夕方には、何か所かある避難所を訪れる。そこで被災者の必要に応じた手助けをする。希望者に肩たたきと肩もみを行い、話に耳を傾け、銭湯に車で送り迎えしたりする。賀川たちが最初に頼まれたのは、津波で家と田畑を失った漁師が、山のかなかに30年ほど放置しておいた畑の開墾である。次に従事した作業は、海辺にあった海産物加工会社の片づけだった。最後は中古オーディオとレコード販売店の復旧作業だった。訪れた避難所には、原発事故の放射能汚染で全住民の避難となった福島の飯館村に実家があった木田さんという夫婦がいた。木田さんが言う。親や自分たちは2回も棄民にあった。1回目は戦争で、2回目は原発で。そしてまた、国は国で2回も敗戦した。2回目の敗戦というのは、原発の大惨事によるものだ。そして、「地震と津波は止められ

年11月号）、「教育はどうあるべきか——その原点に立ち返って」（同07年11月号）、「北京に流れる藤村の詩」（埼玉県高等学校国語科教育研究会「研究集録」第50号、10年3月）、「ある取材記——佐渡金北山遭難事件をめぐる」（『AMAZON』400号、03年7月）、「帰らざる白鳥」（同324号、1991年11・12月）、「健気なる者へ」（同317号、91年3月）

文学をどう考えるか

小説には、リアリズム小説、ミステリー、ファンタジー小説等がありますが、何かを表現したい場合、どのような方法の小説であってもいいと思います。しかし、それらが今を生きる時代や、日本と世界の状況とどう関わっているのか、なぜ、今、その作品を書きたいのか、書かなくてはいけないのか、それが大事だと考えています。

私には戦争体験はありませんが、生きてきて、現在ほど強い危機感を覚えることはありません。自由、人権、民主主義、憲法第9条、自然環境……。どれもが、かつてないほどの危機にさらされています。3・11が誘発した原子力発電所の大惨事は、原発が私たちや私たちの子孫の生存までも脅かすものであることを示しました。言うまでもなく、何事も命と安全と平和があつてこそです。文学も、どこかでそれらにつながるものでありたいと願っています。

ない。でも、原発は止められる」と言った。そこに賀川と一緒に活動している女性、村田さんが入ってきた。

事故前には、中にあつたサービズホールに勤めていた村田さんは、その悔いから、原発問題を詳しく調べていて、ドイツがどのようにして脱原発に至つたのか語つた。ドイツは、ソ連のチェルノブイリの原発事故によって、1300キロも離れた南部のバイエルン州を中心として、放射性物質に汚染された深刻な経験があつた。首相のメルケルが重視したのは、諮問した倫理委員会の提言書だった。そして、フクシマの事故で原子力発電所のリスクは大きすぎる事が分かつた、だから一刻も早く原発を廃止し、よりリスクの少ないエネルギーに替えるべきだ、という勧告を受け入れた。村田さんは、ドイツ国民と指導者が経済よりも倫理を優先したことは、すごいことだと言つた。

避難所での4人の議論は、子孫も安心して暮らせる社会を何としても創っていく必要がある、それは日本だけでなく、世界の未来を左右する分かれ道にのではないか、今度こそ見晴らしのいい未来を拓くチャンスでもあり、世界に対しての日本の責任ではないか、というところに至つた。「地震と津波は止められない。でも、原発は止められる」「がんばろう！ 日本」ではなく「変えよう！ 日本」「変わろう！ 日本」じゃないか、という啓示のような木田さんの言葉を反芻しながら、賀川は避難所を後にした。